

保育園での医療的ケア児への保護者支援のあり方を探る — 導尿時の保育士との関わりから —

*Exploring How to Support Parents for Medical Care Children at a Nursery School
— From the Relationship with Childcare Teachers during Urination —*

小田 良枝 ODA Yoshie
(人間発達学部)

はじめに

研究者は保育園等に勤務して30年になるが、社会状況の変化による子育て環境が複雑になり多様化していることを感じている。2008年の保育所保育指針の改定で、「保護者に対する支援」が独立した章立てとなった。障害児保育については「障害や発達上の課題が見られる子どもとその保護者に対しては、更に十分な配慮のもとに保育並びに支援を行うことが必要¹⁾」と指針の解説に記載された。2018年の保育所保育指針の改定では、保護者支援から子育て支援と章立ても変わった。保護者の意向を尊重して子どもの成長に気付き、子育てに喜びを感じられるよう連携を取り支援を行うことも求められるようになった。

2018年、医療保育専門士の資格取得の研修会で、全国の医療的ケア児を保育する保育士と話をする機会を得た。研究者以外の全ての保育士は施設や医療現場で勤務していた。障害児保育をA県T市内の殆どの保育園で行っていることを話すと多くの障害児や医療的ケア児を受け入れている現状に驚く人も多くいた。そこで、指導者でもあるA県初の指導保育士にA県の障害児保育の取り組みの歴史をインタビューした。A県での障害児保育は、1967年に児童福祉法の一部が改訂され、その後1979年に養護学校全員就学が決定されたことにより始まった。指導者が保育園で障害児の受け入れを実施するように県内の園長たちに説明した際、保育の方法がわからないということで大反対であったという。そこで、実施に向けて障害児保育についての研修や勉強会を行ったということであった。また、指導者の発案で1979年にA県立保育大学校が開校し、養成課程のみならず研究課程(A県内の経験年数10年から主任クラスの保育士が3か月間研修)も開校され障害児保育等を現役の保育士が学ぶ機会を得た。2001年にA県立保育大学校閉校後、現在も現任研修(障害児研修)として、日程など大幅に縮小されたが引き継がれている。現在T市では、医療的ケア児の受け入れは、障害児保育の中に位置づけられている。

2018年、私は医療的ケア児が在園するT園に主任保育士として異動した。T園には3, 4, 5歳児87人中10人以上の障害児保育対象児が在園している。そのうちの1人は、医療的ケア児で導尿を必要とする5歳児の二分脊椎の女兒である。導尿は医療的ケアであり、

保育士が行うことは出来ない。その為、母親が13時ごろ保育園に来ていた。導尿の場に保育士は誰も関わっていなかった。また、母親は導尿の為に保育園に来た時、走って事務所の前を通り過ぎていた。母親は事務所の保育士の様子を一切見ることなく、保育士も母親の足音がしても全く気にする様子が見られなかった。研究者は、母親が来ていても存在すら認識していない様子に違和感を抱いた。研究者は、導尿時は母親とのコミュニケーションが可能な時間になると考え、医療的ケア児と母親に継続的に関わり、親子の変化から保護者支援のあり方を探っていきたいと考えた。

今回言葉の定義として、研究者はT園の主任保育士、医療的ケア児は、5歳児の二分脊椎の女兒、母親は医療的ケア児の保護者、担任保育士は医療的ケア児が在籍する5歳児クラスの担任保育士、保育士は厚生労働省で保育士登録した保育士全体とする。

第1章 文献研究

保育園での医療的ケア児への保育士の関わりに関する先行研究は、研究者が調べた中では見当たらなかった。そこで、日本における障害児保育の歴史や文部科学省における医療的ケア児への処遇等を調べた。

(1) 日本における障害児療育の歴史

日本の療育は、東京帝国大学整形外科の初代教授の田代義徳（1864-1963）が、1916年にアメリカで Widener Memorial Industrial Training School for Crippled Children を視察し、アメリカの障害者への教育システムに深く感銘を受けたことによるといわれている。その後、「日本初の肢体不自由児の為の学校である柏学園を柏倉松蔵（1882-1964）1921年に開校に尽力し、その後、1932年に日本で初めて公立の肢体不自由児の学校である光明学校の開校²⁾につながったとある。肢体不自由の名称は、1929年ごろ股関節結核に罹患していた帝国大学の学生の橋本竜伍が、「不自由ではあるが、不具ではない²⁾」といったことを参考にしてできた言葉と言われている。その後第2代東京帝国大学整形外科教授の高木憲次（1889-1963）が、1942年に整肢療護園を開設した。この開園を機に、「療育」という言葉を使うようになったと言われている。高木憲次が考えた療育の概念を図1に示す。

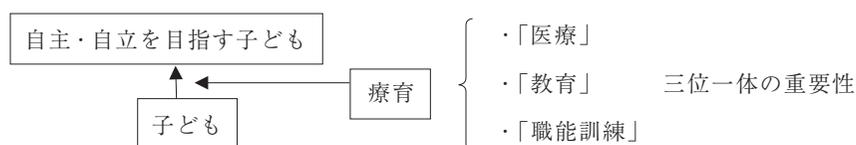


図1 高木憲次が考えた療育の概念

戦前に開園した施設では、専門職の資格を取得する仕組みは整備されておらず、試行錯

誤の中、子どもたちの為に改善、工夫をしていた。児童福祉法（1947年草案）当時の肢体不自由児施設での専門的な役割の考え方と現在の資格の比較を図2に示す。実際に保育園での障害児保育や療育は、それらのすべての部分を任されていることが多い。外部の専門機関との連携は保護者が行い、日々の保育園での保育は保育士の専門性に任されている。

現在、医療・心理の分野の専門職は、児童福祉法の改定により資格取得方法の見直しや資格取得後の研修体系の整備を行い、専門性を高める努力がされている。

肢体不自由児施設入園児の原因疾患の年代別構成比の推移は、戦後から1960年代は結核性疾患やポリオが多かった。その後、1990年代には1960年代と比べ脳性麻痺や二分脊椎などの疾患の割合が2/3以上に増加し、それ以降は疾病の割合はほとんど変わらない。現在では、法令改正などもあり、障害児施設のみならず保育園においても麻痺性の疾患や遺伝性の疾患の入所が増えている。保育園では、子どもたちは毎日繰り返している生活や遊びの中で教育を受け、訓練を行っている。

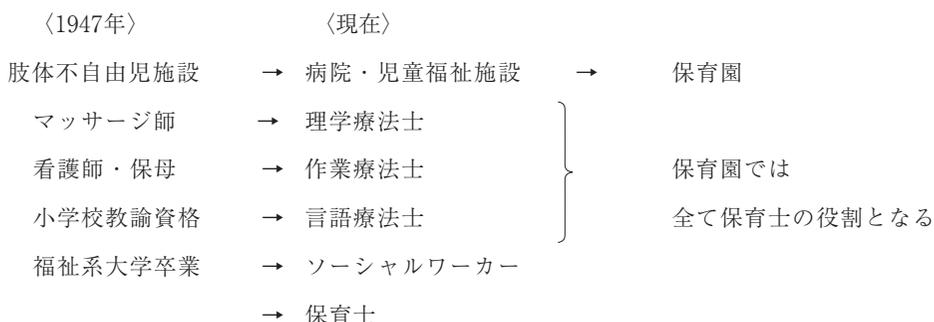


図2 児童福祉法（1947年草案）当時の専門的な役割の考え方を現在の職種に示す

(2) 保護者と医療的ケア児の保育園・幼稚園・学校との関わりについての報告例

入園後の園児の適応状況が、母親のストレスに大きく影響する（山内、奈良間、塚本：1990）という見解がある。この研究では、導尿を行っている医療的ケア児の就園時の適応状況、適応状況と母親のストレスの状況を明らかにすることを目的としていた。三例が調査されていたが、学校や保育園、幼稚園の理解や他児の理解、受け入れ状況による影響があることが認められた。医療的ケア児の新しい環境変化への適応が、健康状態の維持に影響されることが挙げられていた。そして、保護者のストレスの原因は、医療的ケア児が合併症などを起こし健康状態が悪化することであった。三例とも家庭での病気に対する認知や家族間の協力体制にも影響があることが認められるという見解であった。

医療的ケアと自立活動の指導を教員が各専門職と連携して取り組む事例（岩切：2016）からは、多職種との連携には、指導者、時間、期間、目標設定など教育支援計画が重要であることが示されていた。この場合の事例では、養護学校へ通っている女子高校生の為

に、高校を卒業して社会に出る前の心身の自立を促す目標を教員が掲げていた。具体的には、医療的ケアの必要な女子高校生に対して自立導尿を目指していた。個別的教育支援計画を作成し、排尿自立の自覚を促すところから始め、2年計画で自立導尿を進めた。教育支援計画の中で、導尿等配慮が必要な部分の指導は、教員が男性であり、女性の養護教員や看護師、作業療法士などが指導や援助に当たった。導尿指導はデリケートな課題であり、医療的ケア児を中心とした担任と保護者、医療機関等との連携の重要性が示されていた。

(3) 小児の脳神経疾患の発達過程

小児の脳神経疾患においては、身体的のみならず精神的にも発達の上で障害を合併することが多くある。精神面の発達に焦点を当てた研究として、水頭症群と水頭症を発症していない二分脊椎群と小頭症、奇形等その他の疾患群の3群に分け、津守式乳幼児精神発達質問紙の横断的資料による研究（古川、野田、市橋、山口、大井、松本：1990）³⁾がある。『『社会』では、3歳までは順調な発達を示すが、それ以降の『子供同士の相互規制や自立生活の拡大』に関する項目が水頭症群やその他の疾患群で困難となる。これは、通院や運動障害のための経験不足が大きく影響していると考えられる。』³⁾『『食事・排泄・生活習慣』では、個人差が大きく年少時期から保育園生活を行っている児は年齢以上の発達を示している例も多い。』³⁾という見解がある。保育園等での毎日の生活の中での繰り返しの経験が、精神面や社会性の発達に影響があることを示している。

(4) 川崎市における肢体不自由児への統合保育

川崎市においては、1974年頃から保育園で障害児保育が行われていたが、肢体不自由児の受け入れは困難であった。しかし1980年代後半になり、療育センターでの通園療育を経た肢体不自由児が、地域の保育園などへ入園する統合保育が行われるようになったとある（富樫、芝原、渡辺、石原、池添、谷島：1993）。肢体不自由児の療育センターへの来所年齢は、0歳2カ月～1歳5カ月であり、その後療育経験への移行は、0歳11カ月～3歳4カ月であった。早期から療育を行うと同時に、保育園への入園を目指し地域の幼稚園や保育園と連絡を取り交流を行うことで、地域の幼稚園や保育園の肢体不自由児への理解が得られたとある。施設の連携が、肢体不自由児の理解及び入所へつながることを示している。

(5) 保育士の専門性の実態

現場で働く保育士121名へのアンケートにより、障害のある子どもを担当した経験があるか調査した結果、86.8%、105名の保育士が担任を経験していた。また、経験がない保育士の75%が保育士経験5年未満であることが明らかになったとある（松尾：2013）。

アンケートの結果から、障害児への保育の知識や技術についての悩みと共に保育士の関わりとして、非言語のコミュニケーションを学ぶことの重要性を多く挙げていた。また、大学時代に、障害児保育の専門的な知識や発達特徴を学ぶと共に、一人一人を丁寧に視る保育力や保護者への支援の技術指導を大学で受ける必要があることが示された。

(6) 学校における医療的ケア児への取り組み

1998年に養護学校での医療ケアは、条件付きで看護師及び看護師の資格を持たない教員が行うことを是認するという基本姿勢に変更しつつあった。しかし、「医療的ケアを保護者以外の第三者が行った場合の個人責任と学校の管理問題が問題となる。」⁴⁾と責任問題での課題があり教員による医療的ケアの実施は難しかった。その後、文部科学省からの「学校における医療的ケアの今後の対応について」（2019年3月20日）に新たな方針が示された。学校において医療的ケアを行う場合には、教育委員会において看護師の確保の必要性が示された。実際に医療的ケアを行う場合は、看護師等を中心として、教職員も協力しながら医療的ケアに当たるようにとあり、状況に応じて教職員が医療ケアを行うことも示唆された。更に、保護者との連携や医師の指示書による指示などの必要性も示された。

第2章 T市の医療的ケア児への取り組み

T市の障害児保育及び医療的ケア児の受け入れは、保護者の希望を基に希望園で体験保育を行った上で決定されている。体験保育では、対象児の現状からどのような保育が望ましいかを考慮し、保育課の職員、園、保護者と相談し入園先を決定していく。T市では、研究者が就職した30年前から障害児の受け入れは行っていた。しかし、長時間保育や夏季保育などの平常保育時間（8時から16時）外の受け入れには消極的であった。平常保育時間外に必要な保育士の加配が原因と考えられた。その後、公立保育園5カ園中、乳児専門園を除く4カ園が1993年に障害児指定園に移行した。現在障害児や医療的ケア児の受け入れは、障害児指定園で行われることが殆どである。つまり、保育所での医療的ケア児への保育は、障害児保育として位置付けられている。

2018年には厚生労働省から、「医療的ケア児保育支援モデル事業」の公募があった。「この事業は、受け入れが可能となるよう、保育所等の体制を整備し、医療的ケア児の地域生活支援の向上を目的としている。」⁵⁾とあり、T市もモデル事業に公募し2人が保育園に入所している。そのうちの1人は二分脊椎の5歳児の女兒であり、研究者の勤務する園に在園している。現在、5歳児クラスの暦年齢の集団の中で過ごしているが、必要に応じて1対1の個別対応をしている。下肢に装具を付けているため、外靴と上靴の脱ぎ履きや衣類の着脱に時間を要する。散歩時など活動や状況に合わせ、個別に付き添い対応している。

T市の2018年の具体的な支援事業としては、担任保育士の加配配置が挙げられる。T市の障害児保育の保育士基準は、園児4人に対して保育士1人加配である。肢体不自由

（医療的ケア児含む）においては、園児3人に対して保育士1人の加配になっている。研究者の園では、4月当初5歳児26人中4人加配対象児であり、そのうちの1人が医療的ケア児であった。4、5歳児の保育士配置基準は、保育士1人に対して園児30人が保育士基準である。

つまり、担任保育士の人数の計算は以下になる。 $1 \div 30 \times 22$ （健常児の人数） $+ 1 \div 4 \times 3$ （障害児の人数） $+ 1 \div 3 \times 1$ （医療的ケア児の人数） $= 1.81667 \div 2$ （人）である。しかし、保育士は3人配置された。医療的ケア児に対して、1対1で保育できるように配慮された保育士配置であった。

第3章 事例研究 導尿時の関わり

1. 研究の目的

保育園での5歳児の二分脊椎の女児の導尿時に研究者が継続的に関わった事例から、親子の変化を探り、医療的ケア児への保護者支援のあり方について検討していくことを目的に本研究を行った。

2. 研究の方法

- (1) 研究対象者：対象者は、医療的ケアが必要な保育園園児とその保護者
（保育園園長、保護者に文書による了承を得たうえで実施）

園児は、二分脊椎であり、導尿と下肢の装具が必要な5歳児女児1名
保護者は、医療的ケアの必要な園児の保護者（母親）を対象にする。

- (2) 継続的な事例を取る。

医療的ケア児の導尿時に、研究者が定期的に関わる。

- (3) 調査期間：倫理審査申請後承認を得られた日以降から2019年5月31日まで

- (4) データの調査方法

保護者に説明する前に、調査の概要を保育園園長に説明し、協力を得る（研究調査書、研究調査願を用いて説明をする）。保護者に研究概要を説明し、調査協力を依頼する（依頼書及び同意書を用いて説明をする）。

研究中に得た紙類などの個人情報特定される恐れのある書類は、研究者の自宅の鍵の掛かる戸棚に保管する。また、研究終了後、紙類などの個人情報特定される恐れのある書類はすべて、シュレッダーで処理後、資源化センターに持ち込み廃棄する。

3. 結果

(1) 2018.5 「導尿を研究者が初めて見た時の様子」

子どもの様子	母親の様子	研究者の言葉掛け・思い
<p>・研究者と母親の様子を笑顔で見ている。</p> <p>・母親にすべてを任せている。装具の着脱や衣類を着せてもらう。</p> <p>・使用后、トイレの水は流さない。</p> <p>・笑顔で母親と研究者の顔を交互に見る。研究者と母親の話を聞いている。</p>	<p>・「え、そうなんですか？」</p> <p>・「……いいですよ。」</p> <p>・排尿が終わると、慣れた手つきで、クリーンコットンや管を新聞広告に包み、スーパーの袋に片付ける。トイレの水を流す。</p> <p>・「1時半からなんです。」</p> <p>・「間に合います。」と笑顔で言う。</p> <p>・「大丈夫ですよ。」と笑顔で答える。</p>	<p>・「こんにちは。今年度から異動してきた小田です。導尿の時に挨拶したいと思っていたのですが、タイミング逃してすみません。」</p> <p>「導尿の様子見させてもらってもよいですか？」</p> <p>・導尿の様子を見学する。導尿の管は、ボールペンの替え芯位の太さであることを知る。女兒の場合、尿管への管の挿入が難しいことが理解でき、挿入には、練習が必要だと理解できた。</p> <p>・導尿の母親の行為はスムーズで手際が良いと思った。</p> <p>・導尿に思ったより時間がかかったので（10分程）「お母さんのお仕事は何時からですか？」と聞く。</p> <p>・「間に合いますか？」と時間が迫っていたので聞く。</p> <p>・「昼ごはんたべましたか？」と聞く。</p> <p>母親は、病棟の看護師をしている。仕事内容を考えるといつも同じ時間に休憩を取る事は難しいのではないかと思い、心配になった。</p>

結果

① 医療的ケア児への保育士の支援のあり方

研究者自身が導尿の方法を全く知らなかった為、様子を見学することで状況を把握することができた。実際に見たことで導尿の手順や管の太さ、尿管への挿入方法など理解した。医療的ケア児は、研究者が導尿の様子を見ていることを嫌がる様子はなく、母親と研究者の会話の様子を見ていた。また、研究者と目が合うと笑顔になった。研究者は、導尿を行

うことはできないが、その場において保育士として関わることは可能であると理解した。

② 保育士の専門性を活かした保護者支援のあり方

導尿の様子を見学させてほしい旨を伝えた時は、驚いた表情であった。しかし、母親は一瞬間が空いたが、すぐに笑顔で「……いいですよ。」と答えた。研究者は、導尿の様子を見たことがないので知りたいということを正直に伝えた。実際に見学することで、導尿時間よりも着脱や装具の脱着に時間がかかることを理解した。

(2) 2018.7 「プール遊びの様子を伝えた時の様子」

子どもの様子	母親の様子	研究者の言葉掛け・思い
<ul style="list-style-type: none"> ・導尿の様子を見に来た研究者に笑顔を見せる。 ・自分のことを話していることが分かり、母親と研究者の顔を交互に見る。 ・研究者の顔を見て、頷く。「うん」と言う。 ・母親と研究者の顔を交互に見る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「こんにちは」 ・「プール好きなんですけど。プールに入るようになったせいか、便がよく出るようになって。」 ・「いつも夜に浣腸したり、下剤を調整するんですが、プールで出ちゃうと困りますよね。」 ・「そうなんです。迷惑ですよ？〇〇は、便が出る感覚がないのでわからないし、便がプールで出ると〇〇も嫌がるので。プール好きだけどどうしようかと。」 ・「わかりました。ありがとうございます。」と言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「こんにちは」と先に母親に挨拶をする。〇〇ちゃんの顔も見る。 ・「プール始まったけど、〇〇ちゃんプール好きですね。」と声をかける。 ・「腸の動きが良くなるんだよね。良かったじゃないですか？」 ・「あ、そうですね。」 簡単に良いとか悪いとか言っただけは、いけないなと反省した。 ・「〇〇ちゃん。プール好き？うんちの事心配？」と聞く。 ・「お母さんが心配なのは、プールに入っている時に便が出てしまって、〇〇ちゃんが嫌な思いをするのではないかということと皆に迷惑がかかることですか？」 ・「担任とも相談して、入る時間帯や入り方を考えてみます。」 「入れる方法があると思うので、今日の帰りか明日の朝、担任から連絡します。」と伝えた。

結果

① 医療的ケア児への保育士の支援のあり方

今回の事例では、医療的ケア児が、不安に思っていることや困った自分の気持ちを表出

した場面であった。6月末からプールが始まり、研究者は監視係として幼児クラスのプール活動の様子を見守っていた。その為、医療的ケア児が、水に浮き、潜り、声を出して笑いながら顔にかかる水を手で拭く姿などプールでの活動を楽しんでいることは理解していた。医療的ケア児へのプール活動は、装具を外す為、安全面での配慮が重要であり、事前に担任保育士と確認していた。しかし、排便については、予想はしていたものの出た時の対処しか考えていなかった。

② 保育者の専門性を活かした保護者支援のあり方

導尿を見守る際に、園での医療的ケア児の具体的な姿を伝えるようにしていった。7月に入ると、園生活での母親の心配な気持ちが語られるようになってきた。プール活動が始まり便の回数が増えたことや毎晩下剤を用い保育園で便が出ないように排便コントロールをしていることが明らかになった。母親は、医療的ケア児に対して、プールの中で排便してしまったらと心配する気持ちとプールでの活動が好きなので経験させてあげたいという気持ちがあることが理解できた。そして、他の園児や保育士に迷惑をかけてはいけないという気持ちがあることが認められた。

(3) 2018.8 「午睡前の導尿の様子」

子どもの様子	母親の様子	研究者の言葉掛け・思い
<ul style="list-style-type: none"> ・午睡の為に遊戯室に移動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・母親が走りながら、事務室の前を通る。 ・2階の階段を上がり、クラスに行くも誰もいなかった為か、降りてくる。 ・「大丈夫ですよ。」と笑顔で答える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・母親が走っている姿に気が付く。午睡で、1階の遊戯室に移動しているのかもしれない。お母さん忙しいのに、2階に上がる手間をかけてしまうと思った。 ・「お母さん、ごめんなさい。今、2階に行かれましたよね。」と謝る。
<ul style="list-style-type: none"> ・一階の遊戯室の隣のトイレに母親と移動した。 ・導尿をしてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊戯室トイレで、導尿の準備をする。 ・導尿をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・導尿の様子を見る。
<ul style="list-style-type: none"> ・ハンカチがないことに手洗いの後、気が付く。服で手を拭こうとする。 ・ペーパータオルで拭く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「あー。」と笑顔で本児と顔を見合わせる。 ・ペーパータオルで手を拭く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「午睡で着替えたもんね。〇〇ちゃん、ペーパータオルつかいん。お母さんも使って下さい。」と言う。

結果

① 医療的ケア児への保育士の支援のあり方

5歳児は、1階の遊戯室で午睡している。その為、医療的ケア児の導尿の時間と午睡の為に移動する時間が重なり、日によって導尿をする場所が異なることが明らかになった。

1階のトイレで導尿を行った場合、午睡の為に着替えを済ませており、医療的ケア児は、手洗い後のハンカチをもっていなかった。医療的ケア児の午睡前の装具の着脱は、午睡用の衣類に着替えの前後、導尿の際及び午睡時布団に入眠前にも行われていることが明らかになった。午睡前に何度も装具の着脱が行われることから、母親が導尿に来た時に、どの状態であることが良いのか担任保育士と共に考えていくきっかけとなった。

② 保育士の専門性を活かした保護者支援のあり方

午睡が始まったことにより、導尿の為に母親が保育園に来た時に、医療的ケア児の保育の場所も移動している場合があった。その為、毎回母親は医療的ケア児がいる場所を確認する必要があった。

(4) 2018.9 「装具が故障し2週間欠席後の様子」

子どもの様子	母親の様子	研究者の言葉掛け・思い
<ul style="list-style-type: none"> ・他のクラスの子が、トイレを覗くことに気が付き、あちこちを見回している。 ・研究者が△ちゃんに声を掛ける様子をじっと見ている。 ・研究者の顔を見返し、笑顔になる。 ・母親に管を持つように促され、持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・導尿をしている。 ・「そうなんです。気になるのか、いつも見に来るんです。」と微笑んで言った。 ・「ありがとうございます。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「○○ちゃんのこと、気になるの？」と様子を見ていた△ちゃんに聞く。△ちゃんは、目を見開いて研究者の顔を見る。△ちゃんは何も言わない。 ・「△ちゃん、おしっこ出ないなら、お部屋に行くんだよ。」トイレを覗く△ちゃんに再び声を掛ける。△ちゃん、部屋に戻る。 ・○○ちゃんを笑顔で見る。 ・母親に「よくあるんですか？」と聞く。 ・「そうなんです。分かりました。一度、クラス担任に話をしてみますね。」

<p>・管を見ていたが、一瞬研究者を見て頷く。</p> <p>・後始末は、母親にしてもらう。</p>	<p>・「〇〇、ここ持って。」と子どもに声を掛ける。</p> <p>・「ちょっとずつですけど。」と答える。</p> <p>・「終わった？」と声を掛け、管の後始末をする。紙おむつを履かせ、ズボンを履かせ、装具を付ける。</p>	<p>・「管を自分で持つようになったんですね。すごいです。」と声を掛ける。</p> <p>・△ちゃんのクラス担任に確認した。担任もトイレに度々いることを承知していた。</p>
--	--	---

結果

① 医療的ケア児への保育士の支援のあり方

装具が壊れていた為、久しぶりの登園であった。医療的ケア児の導尿の様子を見に来た他の園児に対して、今まで見られなかった周りを気にする姿が見られた。△ちゃんが自分のクラスに戻り笑顔で研究者を見返した姿から、導尿している姿を見られたくない、恥ずかしいという感情が芽生えた姿であると捉えた。また、保育園を休んでいる間に、導尿の管を排尿中に持つようになっていた。自立排尿の練習に取り組み始めたことも明らかになった。

② 保育士の専門性を活かした保護者支援のあり方

導尿の場所は、トイレの入り口から奥の場所を使用している。しかし、他の園児も使用する場所である。今までも、覗き込む園児はいたのであろうが、今回、研究者がその場にいたことにより、母親は日頃の姿が伝えやすかったのではないかと考えた。母親も気にしていたことが、穏やかな口調ながら「いつも見に来るんです。」という言葉で理解できた。また、保育園を休んでいる間に、医療的ケア児が、排尿中の尿道に固定された管を自分で持つようになっており、自立導尿への第一歩をスタートさせていた。その姿に驚いたことを母親に伝え、成長の姿を共通認識した。

(5) 2018.11 「自立導尿の練習を始めた様子」

子どもの様子	母親の様子	究者の言葉掛け・思い
<p>・保育士の顔を見て、ニコニコする。</p> <p>・導尿の管を自分で尿道を探して差し込み固定している。</p> <p>・「うん」と頷く。研究者の顔を見る。</p>	<p>・研究者の方を向き「こんにちは」と笑顔で言う。</p> <p>・「最近、少しずつやってるんです。思ったより、出来る</p>	<p>・「こんにちは」と母親と医療的ケア児に挨拶をする。</p> <p>・「あ、自分で出来るようになったの?」「すごいねえ。」と</p>

<p>・「うん。」と言い、管の角度を時々変えて調節している。角度を変えると勢いよく尿が出始めた。</p> <p>・母親の顔を見る。</p> <p>・保護者に、紙パンツ、長ズボン、装具を付けてもらう。</p> <p>・研究者の顔を見て口を大きく横に広げ笑顔になる。</p>	<p>よくなってきたんです。」</p> <p>・「そうなんです。でも、高いので、あんまり買えないんです。」</p> <p>・本児が、顔を見つめたことで気が付いたのか、「出た？」と声を掛け、排尿後の始末を行う。</p> <p>・衣類を着せ、装具を付ける。</p> <p>・「暫くお休みしていたので、その時に時々練習したんですよ。」</p> <p>・「暫くは、学校に行って、導尿になると思いますけど。」と笑いながら話す。</p> <p>・「小学校は、家からも職場からも近いので、楽になります。」</p>	<p>声を掛ける。管が以前使用していた製品と異なる。(バックジュースのストローみたいな形状であり、管が太いことに気が付く。)</p> <p>・「管が、違いますね。新製品ですか？」</p> <p>・「そうなんです。」</p> <p>・「難しくない?」「その後はどうするの?」と様子を見て声を掛ける。</p> <p>・導尿の様子を見る。</p> <p>・「自分でやろうとしているんですね。びっくりしました。」と伝える。</p> <p>・「小学生になったら、すぐに自分で導尿出来るようになりそうですね。」</p> <p>・「そうなんです。」と言った。毎日保育園に導尿に来る大変さに気が付いた。</p>
---	---	---

結果

① 医療的ケア児への保育士の支援のあり方

〇〇ちゃんが自分で導尿しようとしている姿に驚き、声を掛けた。10月に小学校の就学児検診があり、小学校へ行ったことで気持ちに変化があったのかもしれない。自分で管を尿道に差し込んだ後、管の位置を工夫して尿を出す姿も見られた。

② 保育士の専門性を活かした保護者支援のあり方

9月の母親に促されて尿道に差し込んだ管を持つ姿にも驚いたが、その後の〇〇ちゃん自身が導尿しようと母親と一緒に取り組んでいる姿に更に驚いたことを伝えた。成長の姿

を伝えたことから、いつから自立導尿に取り組み始めたか知ることが出来た。また、自立導尿を促すために、導尿の管も医療的ケア児が使いやすい有料の管を購入し取り組んでいることも明らかになった。「小学校は、家からも職場からも近いので、楽になります。」と言う母親の言葉から、毎日保育園へ導尿に来る大変さが理解できた。

(6) 2018.11 「排便していた時の導尿の様子」

子どもの様子	母親の様子	研究者の言葉掛け・思い
<ul style="list-style-type: none"> ・だまってお尻にこびりついた便を拭いてもらう。 ・便器の枠を両手で掴み、お尻を母親の方に向けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙おむつに出してしまった便を、何度もお尻拭きでこすり取っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・便の臭いがトイレ中に漂っていた。便の臭いが強いと思った。 ・「便が出ていたんですね。」便の状態やこびりついてる様子から、今出たばかりでないと理解した。
<ul style="list-style-type: none"> ・母親に促されお尻を突き出す。 ・研究者の声に頷く。 ・時々体位を崩しながらも、両手で便器を持ち、バランスを崩さないように足を踏ん張っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「そうなんですよ。拭いてもなかなか取れなくて。」と言った後、「〇〇、ちょっとお尻上げて。」と言い、お尻拭きで便を拭き続けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「もう一度拭いてもらうからね。もうすぐキレイになるからね。」「大丈夫かな？」と声を掛ける。 ・いつ便が出ていたのか。なぜ、担任保育士は気が付かなかったのか。担任保育士は排泄の確認はしているかと疑問に思った。
<ul style="list-style-type: none"> ・便器に腰掛け、導尿してもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・便を拭き取ってから、導尿を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・便が、上着やズボンにも付いていることに気が付いた。
<ul style="list-style-type: none"> ・研究者を見て、「うん」と言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「いいんですか。」と言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇ちゃん、服もってくるでね。お母さん、着替えをクラスに取りに行ってきますね。」「何が汚れてましたか。」
	<ul style="list-style-type: none"> ・「肌シャツとズボンと上着です。」と伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「わかりました。ちょっと待っててくださいね。」
		<ul style="list-style-type: none"> ・クラスへ行き、担任保育士に声を掛けた。
		<ul style="list-style-type: none"> ・「〇〇ちゃん、便が出てたみたいで、服にも付いちゃったから着替えいるじゃんね。着替えどこかな？」と言う。

<ul style="list-style-type: none"> ・導尿を終える。 ・研究者を見る。 ・「バイバイ。」と言う。 ・研究者の様子を見ている。 ・研究者と手を繋いでクラスに戻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「いいですか。ありがとうございます。」と言う。 ・「〇〇、行ってくるね。」と言い、仕事に出掛けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任保育士から着替えを受け取りトイレに行く。 ・リーダーの担任保育士が、研究者に気付きトイレの様子を見に来る。 ・母親に「あとやっときますね。お母さん、お仕事に戻ってください。」と言う。 ・「〇〇ちゃんもお母さんにバイバイしてね。」と言い、「おかあさん、いってらっしゃい。」と送り出した。 ・研究者は、汚れた衣類の下洗いをを行う。クラスに〇〇ちゃんを連れて行った。
--	---	---

結果

① 医療的ケア児への保育士の支援のあり方

便が出て時間が経過していたようで便がお尻全体にこびりついていて、医療的ケア児は、下肢に麻痺があり便が出たことに気が付かない。毎日の保育の中で、クラスはどのような排泄の関わりをしているのか疑問に思った。また、医療的ケア児は、おむつ交換時に便が出ていると便を拭き取ってもらう為に両手で便器を掴んで下肢を踏ん張って立っていた。装具が付いていない為、立位は不安定であった。

② 保育者の専門性を活かした保護者支援のあり方

保育士が導尿と一緒にいたことで、着替えを取りに行くことや排泄時、導尿後の援助が出来た。導尿にかかる時間が通常は10分程であるが、導尿の際に排便していると、20分以上かかることが理解できた。

(7) 2018.12 「導尿の時間と雑巾がけの時間と重なった時の様子」

子どもの様子	母親の様子	研究者の言葉掛け・思い
<ul style="list-style-type: none"> ・トイレに導尿に行くのを嫌がり泣く。 ・「うん」というが、トイレに行くことを嫌がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「雑巾がけがしたいみたいで。」と本児の代わりに研究者に伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・泣いている本児を見て、「どうしたの?」と聞く。 ・担任保育士が、「〇〇ちゃんの雑巾がけする場所ととくでね。後でやろうね。」と声を掛

<p>・母親に連れられてトイレに行く。 ・頷く。</p> <p>・気持ちが切り替わったのか、泣き止む。導尿をしてもらう。再び頷く。</p> <p>・お腹を膨らませたり、へこませたりする。お腹に力を入れようと繰り返す。自力排便をしようとする。</p> <p>・息を吐きだすと、股の間をのぞき込んで便が出ているのか確認する。</p>	<p>・〇〇ちゃんをトイレに連れていく。</p> <p>・淡々と導尿の準備を進め、導尿をする。</p> <p>・導尿後、排便に誘いかける。本児に力むように「うーん」とタイミングを合わせ、言葉で伝える。笑顔で研究者を見る。</p> <p>・「出るのわかる？」と声を掛ける。</p>	<p>ける。</p> <p>・「〇〇ちゃん、導尿終わったらやればいいよ。でも、みんなと一緒にやりたかっただね。」と聞きながら、一緒にトイレに移動する。</p> <p>・「そうなんだね。先生が、後でやろうねって言ってたね。ピカピカにしようね。」と言う。</p> <p>・「うんちも出るようになってきてるの?」「練習しているんですね。」と声を掛ける。</p> <p>・感覚がないから便が出てるかどうかを見て確認しているんだと理解した。</p>
--	---	---

結果

① 医療的ケア児への保育士の支援のあり方

12月から5歳児は、給食後の掃除の時間に全員で園内3か所の雑巾がけを始めていた。医療的ケア児も、皆と一緒に動作に無理がない保育室の棚や階段の雑巾がけに取り組んでいた。皆と一緒に取り組みたい気持ちから泣き出し、集団の中での精神的な育ちが示された場面であった。その後、担任保育士の声掛けで気持ちを切り替え、母親とトイレに向かう姿から、自分の気持ちを調整する力や状況を理解する力が育まれていると理解できた。

また、導尿後には、母親の排便を促す声掛けに合わせて、自力排便をしようとする姿があった。自立排尿のみならず、自立排便の練習も始めていたことが明らかになった。

② 保育士の専門性を活かした保護者支援のあり方

掃除をしたいと泣いていた時に、母親はなだめることもなく淡々と導尿を済ませた。その後、自立排便を促していた。母親が導尿後に自立排便を促し、医療的ケア児自身がお腹の動きや便を確認する姿から、何度も取り組んでいることが明らかであった。研究者が、その様子に驚いたことを母親に伝えると笑顔で研究者を見た。

第4章 考察及び結論

1. 医療的ケア児への保育士の支援のあり方

医療的ケア児の導尿時に見守る10分程の関わりを重ねる中で、保育士の専門性を活かす3つの支援のあり方が考えられた。

第1は、医療的ケア児の姿から情緒面の発達の兆しを捉えた上で、医療ケア児自身が気持ちを出せるような関わりや自信につながる支援をすることである。身体の機能だけでなく心の発達を捉えた関わりは、保育士の専門性を活かした支援であり、子どもの情緒面の発達に繋がると考えた。

具体的には、7月のプール遊びの場面で、プールに入りたいという意思がある反面、便が出てしまうかもしれないことが心配である気持ちが明らかになった。9月には、△ちゃんが導尿中の様子を覗く場面があった。△ちゃんが立ち去った後、研究者に笑顔を向ける姿から、恥ずかしいという気持ちの育ちを確認した場面であった。9月に自立導尿に向けて自分で管を持つ、11月に管を差し込む姿が見られた時は、医療的ケア児の姿を認め、研究者の驚きを伝えた。その後の自立排便への取り組みから、排泄の自立に対して自覚、自信を持ったと考えられた。また、便が出ていた時には、便がこびりついている状況を伝え、その後の処置がイメージできるような言葉掛けをした。12月には、集団意識が芽生え、クラスの皆と一緒に雑巾がけをしたいという気持ちから泣き出した場面があった。担任保育士から、皆と一緒に取り組めないが、掃除をする場所は確保してあることを伝えられ納得する姿があった。研究者は、「みんなと一緒にやりたかったんだね。」と医療的ケア児の気持ちを代弁した。

第2は、導尿の様子から、自立導尿に繋がる指先を使う遊びを日頃の保育の中に意識的に取り入れていくことも保育士の専門性を活かした支援であると考えた。9月に、医療的ケア児は、母親が挿入した管を自分で持つようになり、11月には、自分で管を挿入する姿が見られるようになった。導尿は、医療行為であり、清潔への配慮や指先の操作の正確性も求められる。毎日の生活と遊びの中で塗り絵、折り紙やカード遊び、粘土遊びなど微細運動である指先を使う遊びを取り組めるような環境を構成することも、保育士の専門性を活かした支援ではないかと考えた。

第3は、医療的ケア児の生活日課について考えることも保育士の専門性を活かした支援だと考えた。具体的には、毎日13時頃に行われる導尿の時間をクラスの日課の中にどう確保するかということであった。クラスの日課では、5歳児であり排泄の時間は重要視されていない。しかし、医療的ケア児にとって導尿は生活の中で最も重要な時間の1つである。8月の事例では、導尿について午睡前の衣類や装具の着脱と共に導尿を行う場所も含め検討するきっかけとなった。また、11月の導尿前に排便の処理が必要であった場面では、導尿が速やかに行われる為の保育士の専門性を活かした配慮として、担任保育士の排泄の確認の時間や回数を含む基本的な支援の必要性が明らかになった。

2. 保育士の専門性を活かした保護者支援のあり方

保育者の保育相談支援による支援の分類として、親と子ども、子ども同士、保育者と親、親同士などの関係に対する支援、親・子どもなどの個人の成長・自己実現に対する支援、親や子どもなどが生活を営む環境、場に対する支援の3つの考え方がある（柏女・橋本：2010）。今回の保護者支援のあり方は、保育相談支援限定ではないが、保育士の専門性を活かした支援のあり方として参考にし、3つの支援のあり方が示された。

第1は、保育者と親の関係に対する支援として、5月に研究者は、母親に導尿の様子を見せて欲しいと伝えた。導尿は、医療的ケアであり母親は自分が行うことが当たり前と考えていた。園の考え方も同様であった。しかし、医療的ケア児に対しては、国の補助金を受けた支援事業として担任保育士の加配がされていた。研究者は、導尿時も医療ケアは出来ないが保育士の役割があるのではないかと考えていた。そこで、週に1回程度、医療的ケア児の導尿の様子や保護者の援助の様子を傍で見守り、医療的ケア児を中心とした会話を繰り返す中で、その場にいることが当たり前になるような関係を築いていった。12月の掃除がしたくて泣いて導尿を嫌がる場面での母親の淡々と導尿に取り組む姿を見て、5月当初の導尿時の母親の姿を思い出した。保育士の専門性として、傍にいて見守ることも母親の気持ちに寄り添う支援に繋がると理解した。

第2は、親・子どもなどの個人の成長・自己実現に対する支援として、7月に研究者が園での医療的ケア児のプール遊びの様子を伝えることによって、母親の気持ちが表れた場面があった。母親の気持ちを確認しながら会話を進めたが、導尿という作業がある為に、無理に研究者と視線を合わす必要はなく、話をする時間も導尿中と限られており、その事が逆に母親は話がしやすかったのかもしれないと気が付いた事例であった。研究者は、母親の話を担任保育士に繋げ、医療的ケア児がプール遊びを楽しめるよう支援した。また、9月以降の自立導尿へ取り組む様子を見逃さず、医療的ケア児の成長の様子を共有し、小学校就学を見据えた支援について考えていった。12月の掃除がしたくて泣いて導尿を嫌がる場面からは、皆と一緒に良いという心の育ちを成長として捉え、医療的ケア児の気持ちを母親の前で確認した。

第3は、親や子どもなどが生活を営む環境、場に対する支援として、保護者は毎日13時頃、仕事の休憩時間を工面し園児の導尿の為に来園していた。9月の事例から、小学校は自宅にも母親の職場にも近いことが明らかになり、保育園に通う今、時間の工面が一番大変であることが理解できた。速やかに保護者が導尿を行えるように医療的ケア児の導尿時に保育士が様子を見守ると共に、衣類や装具の着脱は日頃から保育士や医療的ケア児自身が行っているため可能ではないかと気が付いた。導尿は医療的ケアであるが、排泄は保育の教育の5領域の中の健康と捉えることが出来る。排泄は、教育であると共に生活行動の1つである。保護者が来園する時間がわかっているからこそ、スムーズに導尿が行えるように担任保育士と連携を取り支援していった。

おわりに

今回の事例研究では、継続的な導尿時の関わりの事例をとり、医療的ケア児や保護者の変化から保護者支援の在り方を探っていきたいと考えた。保育士の専門性として保護者が医療的なケアを行っているときは、安心してケアが進められるように安全・安心の保障をする。医療的ケア児の今の姿や心の動きを保育士の専門性でもって理解し、発達を促す支援や環境を整える。保護者と医療的ケア児を中心とした関係の中で、共に成長を喜び合えるような信頼関係を築く。保護者に、医療的ケア児の成長の姿を伝え、保護者の言葉とその奥にある気持ちを知ろうと寄り添うことの大切さが示された。

しかし、今回の事例研究では、導尿時のみの事例であり、送迎時や連絡ノートを含めた保護者支援のあり方となっておらず、限定的な見解となった。

今後は、医療的ケア児の保護者支援のあり方について、送迎時や連絡ノートを含めた毎日の保育実践の中から考えていきたい。

謝辞

本研究の調査にご理解とご協力いただきましたT市立T保育園水鳥一明園長および保護者に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課：保育所保育指針（平成20年厚生労働省告示第141号）（抄）
- 2) 小崎慶介：日本における障害児療育の歴史 肢体不自由児療育を中心に，Jpn J Rehabil Med Vol. 53 No. 5, 348-352, 2016
- 3) 古川宏・野田和恵・市橋則明・山口三千夫・大井静雄・松本悟：小児の脳神経疾患（水頭症を中心に）の発達過程 津守式乳幼児精神発達質問紙の横断的資料による検討，神戸大学医療技術短期大学部紀要，6，19-27，1990
- 4) 文部科学省：学校における医療的ケアの実施に関する検討会議の設置について，2017
- 5) 厚生労働省 子ども家庭局保育課：平成30年度医療的ケア児保育支援モデル事業公募要領，1-5，2018

参考文献

- 全国社会福祉協議会編：新保育所保育指針を読む [解説・資料・実践]，16-17，社会福祉法人 全国社会福祉協議会，東京，2018
- 岩切祐司：二分脊椎の生徒に対する自己導尿確立に向けた効果的なアプローチに関する実践研究—医療的ケアと自立活動の指導を密接に関連付けた事例—，筑波大学特別支援教育研究，実践と研究，8，12-22，2014
- 山内尚子・奈良間美保・塚本雅子：二分脊椎症患児の就園時の適応状況と母親のストレス，日本小児看護学会誌，8巻2号，122-117，1999
- 松尾寛子：保育士資格取得者に関する障がい児保育の専門性についての研究
- 久保山茂樹・小林倫代：保護者の「語り」から考える早期からの教育相談，国立特殊教育総合研究所，教

育相談年報, 第21号, 11-20, 2001

A市の公立保育所に勤務する保育士がかつて担当したことがある障害について, 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要, 15巻2号, 23-27, 2012

今井和子: 保育を変える 記録の書き方 評価のしかた, 222, ひとなる書房, 東京, 2011

柏女霊峰・橋本真紀: 増補版 保育者の保護者支援 保育相談支援の原理と技術, 279, フレーベル館, 東京, 2010

文部科学省: 特別支援教育について 学校における医療的ケア児の今後の対応について (通知), 2019

Abstract

[The purpose] This research was conducted with the aim of investigating the involvement of researchers in medical care children in nursery schools and seeking support for parents based on changes in parents and children of medical care children. It was.

[Method] In the previous research, we looked back on 30 years of childcare in T City, A Prefecture, where literature research and researchers work. We looked for changes in medical care children and their parents based on the cases in which researchers were involved in the urination of medical care children.

[Result] From literature studies, there was no thesis on the urination of medical care children in nursery schools. However, it was understood that the national support for children with disabilities and medical care children has been enhanced with the times. Based on the experience of researchers involved with medical care children and parents at the time of urination, the development of emotional aspects of medical care children and self-supporting urine, the process of building trust with parents and medical care the way of support centered on children became clear.

[Discussion / Conclusion]

Improvement of education and life support for medical care children has been promoted step by step with the revision of laws and regulations since the end of the war, and it has become clear that it is regarded as the position of childcare for disabled children at daycare centers.

In relation to childcare and parental support for children with medical care through involvement during urination, we thought that it was necessary to make efforts for childcare taking into account the development of the mind and body of children with medical care by utilizing the expertise of childcare professionals. Even though medical care was not possible during urination, we thought it is necessary to convey the state of the medical care child in the nursery school or at home, to feel the feelings of parents, and to provide close support.

In the future, I would like to think about how to support parents of medical care children from daily childcare practices, including pick-up and contact notes.

[Keyword] Medical care child, guardian support, urination

Ethical review application approval organization: Japan Society for Medical Child Care (30-001)